

ゆく雲

樋口一葉

青空文庫

上

酒折さかをりの宮、山梨の岡、塩山えんざん、裂石さけいし、さし手での名も都人ここびと
 の耳に聞きなれぬは、小仏こほとけささ子の難処なんじよを越して猿橋さるはしのな
 がれに眩めめくるき、鶴瀬つるせ、駒飼こまかひ見るほどの里もなきに、勝沼かつぬまの町
 とても東京こここにての場末ぞかし、甲府はさすがに大厦高楼たいか、躑躅つつじが
 崎さきの城跡など見る処ところのありとは言へど、汽車の便りよき頃になら
 ば知らず、こと更の馬車腕車くるまに一昼夜をゆられて、いざ恵林寺ゑりんじの
 桜見にといふ人はあるまじ、故郷ふるさとなればこそ年々としとしの夏休みに
 も、人は箱根伊香保いかけほともよふし立つる中を、我れのみ一人あし曳びき

の山の甲斐かひに峯みねのしら雲あとを消すことさりととは是非もなけれど、
今歳ことしこの度みやこを離れて八王子に足をむける事これまでに覚え
なき愁つらさなり。

養父清左衛門せいざゑもん、去歳こぞより何処どこ※処そこからだに申分ありて寐ねつ起き
つとの由よしは聞きしが、常日頃すこやかの人なれば、さしての事はあるまじと医者いしやの指図けうがなどを申やりて、この身は雲井うゑいの鳥の羽が
ひ自由なる書生の境界けうがいに今しばしは遊ばるる心なりしを、先きの日故郷ふるさとよりの便べんりに曰いはく、大旦那さまことその後の容ようだい躰たいさ
したる事は御座なく候へ共さうら、次第に短氣たんきのまさりて我わが意ままつよく、
これ一つは年の故せいには御座候はんなれど、随分あたりの者御機おほげ
んの取りにくく、大心配おほしを致すよし、私わたくしなど古ふる狸だぬきの身なれば

とかくつくろひて一日二日と過し候へ共、筋のなきわからずやを
 仰せ^{おほ}いだされ、足もとから鳥の立つやうにお急^せきたてなさるには
 大閉口^{おほ}に候、この中^{ちゆう}より頻^{しきり}に貴君様^{あなた}を御手もとへお呼び寄せなさ
 りたく、一日も早く家督相続あそばさせ、樂隠居なされたきおの
 ぞみのよし、これ然^{しか}るべき事と御親類一同の御決義、私は初手か
 ら貴君様を東京へお出し申すは氣に喰はぬほどにて、申しては失
 礼なれどいささかの学問などどうでも宜^よい事、赤尾^{あかを}の彦が息子の
 やうに氣ちがひに成つて歸つたも見てをり候へば、もともと利発
 の貴君様にその氣づかひはあるまじきなれど、放蕩^{ほうたう}もの^{ほうたう}にでも
 お成りなされては取返しがつき申さず、今の分にて嬢^{ぢやう}さまと御
 祝言^{げん}、御家督引つぎ最^もはや早きお歳^{とし}にはあるまじくと大賛^{おほ}成に

候、さだめしきだめしその地には遊あそしかけの御用事も御座候はん
それ等を然るべく御取まとめ、飛鳥とぶとりもあとを濁にごすな候へば、
大藤おほふぢの大尽だいじんが息子と聞きしに野沢のけいじの桂次けいじは了りよう簡けんの清くな
い奴どこ、何処どこやらの割前せまへを人に背負せよせて逃げをつたなどとかふいふ
噂うわさがあとに残らぬやう、郵便為替ゆうびんがはきにて証書面のとほりお送り
申候へども、足りずば上杉さまにて御立ごたてかへを願ひ、諸事しよじ清潔きれいに
して御帰ごきりなさるべく、金故ゆゑに恥かぢをお搔かきなされては金庫きんこの番
をいたす我等が申まをけなく候、前申ぜんせし通り短氣たんきの大旦那さま頻
に待ちこがれて大ぢれに御座候へば、その地の御片つけすみ次第、
一日もはやくと申納おさめ候。六蔵といふ通とひ番頭ばんとうの筆にてこの様の迎
ひ状ぶみいやとは言いひがたし。

家に生^は拔^へきの我れ実子にてもあらば、かかる迎へのよしや十度十五たび来たらんとも、おもひ立ちての修業なれば一ト廉^{かど}の学問を研^{みが}かぬほどは不孝の罪ゆるし給^{たま}へとでもいひやりて、その我まの徹^{とほ}らぬ事もあるまじきなれど、愁^つらきは養子の身分と桂次はつくづく他人の自由を羨^{うら}やみて、これからの行く末をも鎖りにつながれたるやうに考へぬ。

七つのとしより実家の貧を救はれて、生れしままなれば素^す跣^{はだ}足^{だし}の尻^{しり}きり半^{ぼん}纏^{てん}に田圃^{たんぼ}へ弁当の持はこびなど、松のひでを燈^{とも}火^{しび}にかへて草鞋^{わらんじ}うちながら馬士歌^{まごうた}でもうたふばかりし身を、目鼻だちの何処^{どこ}やらが水子^{みづこ}にて亡^うせたる総領によく似たりとて、今はなき人なる地主の内儀^{つま}に可愛^{かあい}がられ、はじめはお大尽の旦那^{たんと}と尊

びし人を、父上と呼ぶやうに成りしはその身の幸福しやわせなれども、
幸福しやわせならぬ事おのづからその中うちにもあり、お作さくといふ娘の桂次
よりは六つの年少とししたにて十七ばかりになる無地の田舎娘いなかものをば、
どうでも妻にもたねば納まらず、国を出るいづまではさまで不運の縁
とも思はざりしが、今日この頃は送りこしたる写真をさへ見るに
物うく、これを妻に持ちて山梨の東郡ひがしごほりに蟄伏ちつぷくする身かと思
へば人のうらやむ造酒家つくりざかやの大身上おほしんしようは物のかずならず、よし
や家督をうけつぎてからが親類縁者の干渉きびしければ、我が思
ふ事に一銭の融通も叶かなふまじく、いはば宝の蔵の番人にて終るべ
き身の、氣に入らぬ妻までとは弥々いよいよの重荷なり、うき世に義理
といふ柵しがらみのなくば、蔵を持ぬしに返し長途の重荷を人にゆづり

て、我れはこの東京を十年も二十年も今すこしも離れがたき思ひ、
 そはなにゆゑ何故と問ふ人のあらば切りぬけ立派に言ひわけの口上もあ
 らんなれど、つくろひなきしよう正の処ここもとに唯ただ一人すててかへる
 事のをしくをしく、別れては顔も見がたき後のちを思へば、今より胸
 の中もやくやとしておのづか自ら氣もふさぐべき種なり。

桂次が今をるこもとこ許は養家の縁に引かれて伯父伯母といふ間が
 ら也、なりはじめてこの家やへ来たりしは十八の春、田舎いなかじま縞の着物に
 肩縫あげをかしと笑はれ、八つ口やぐちをふさぎて大人の姿にこしらへ
 られしより二十二の今日までに、下宿屋住居ずまゐを半分と見つもりて
 も出入り三年はたしかに世話をうけ、伯父の勝かつよし義が性質の氣む
 づかしい処から、無敵にわけのわからぬ強情の加減、唯々女房に

ばかり手やはらかなる可笑しきも呑込めば、伯母なる人が口先ばかりの利口にて誰れにつきても根からさつぱり親切気のなき、我欲の目当てが明らかに見えねば笑ひかけた口もとまで結んで見せる現金の様子まで、度々の経験に大方は会得のつきて、この家にあらんとは金づかひ奇麗に損をかけず、表むきは何処までも田舎書生の厄介者が舞ひこみて御世話に相成るといふこしらへでなくては第一に伯母御前が御機嫌むづかし、上杉といふ苗字をば宜いことにして大名の分家と利かせる見得ぼうの上なし、下女には奥様といはせ、着物は裾のながいを引いて、用をすれば肩がはるといふ、三十円どりの会社員の妻がこの形粧にて繰廻しゆく家の中おもへばこの女が小利口の才覚ひとつにて、良人が箔の光つ

て見ゆるやら知らねども、失敬なは野沢桂次といふ見事立派の名
 前ある男を、かげに廻りては家の書生がと安々こなされて、御玄
 関番同様にいはれる事馬鹿らしきの頂上なれば、これのみにても
 寄りつかれぬ価値ねうちはたしかなるに、しかもこの家の立やはなれにく
 く、心わるきまま下宿屋あるきと思案をさだめても二週間と訪おとづ
 問れを絶ちがたきはあやし。

十年ばかり前にうせたる先妻の腹にぬひと呼ばれて、今の奥様
 には継まなる娘こあり、桂次がはじめて見し時は十四か三か、唐人とうじん
 鬘まげに赤き切れかけて、姿はおさなびたれども母のちがふ子は何
 処やらをとなく見ゆるものと気の毒に思ひしは、我れも他人の
 手にて育ちし同情を持てばなり、何事も母親に気かね、父にま

で遠慮がちなれば自づから詞ことばかずも多からず、一目に見わたした
 処では柔和おとなしい温順すなほの娘といふばかり、格別利発ともはげしいと
 も人は思ふまじ、父母そろひて家の内に籠こもりゐにても済むべき娘
 が、人目に立つほど才女など呼ばるるは大方お侠きやんの飛びあがりの、
 甘やかされの我ままの、つつしみなき高慢より立つ名なるべく、
 物にはばかり心ありて万よろづひかえ目にと氣をつくれれば、十が七に見
 えて三分の損はあるものと桂次は故郷ふるさとのお作が上まで思ひくら
 べて、いよいよおぬひが身のいたましく、伯母が高慢がほはつく
 づくと嫌やなれども、あの高慢にあの温順すなほなる身にて事なく仕へ
 んとする気苦労を思ひやれば、せめては傍そば近くに心ぞへをも為なし、
 慰めにも為りてやりたしと、人知らば可笑をかしかるべき自うぬばれも手伝

ひて、おぬひの事といへば我が事のように喜びもし怒り^{いか}もして過ぎ来つるを、見すてて我れ今故郷^{こきよう}にかへらば残れる身の心ぼそさ
 いかばかりなるべき、あはれなるは継子の身分にして、俯甲^{ふがひ}斐な
 いものは養子の我れと、今更のやうに世の中のでなきを思ひ
 ぬ。

中

まま母育ちとて誰^たれもいふ事なれど、あるが中^{なか}にも女の子の大^お
^{ほかた}方すなほに生^{おひ}たつは稀^{まれ}なり、少し世間並^の除け物の緩い子は、底
 意地はつて馬鹿強情など人に嫌はるる事この上なし、小利口なる

は^ず絞るき性根をやしなうて面^{めん}かぶりの大變ものに成^{なる}もあり、しや
 んとせし氣性ありて人間の質^{たち}の正直なるは、すね者の部類にまぎ
 れてその身^こに取れば生^{せい}涯^{がい}の損おもふべし、上杉のおぬひと言ふ
 娘^こ、桂次がのぼせるだけ容^{きりよう}貌も十人なみ少しあがりて、よみ書
 き十露盤^{そろばん}それは小学校にて学びしだけのことは出来て、我が名に
 ちなめる針仕事は袴^{はかま}の仕立までわけなきよし、十歳^{とを}ばかりの頃ま
 では相応に悪^{いたづら}戯もつよく、女にしてはと亡^なき母親に眉根^{まゆね}を寄せ
 さして、ほころびの小言も十分に聞きし物なり、今の母は父親^{てておや}
 が上役なりし人の隠し妻とやらお妾^{めかけ}とやら、種々^{さまざま}曰く^いのつきし
 難物のよしなれども、持^{もた}ねばならぬ義理ありて引うけしにや、そ
 れとも父が好みて申受しか、その辺たしかならねど勢力おさおさ

女房天下と申やうな景色なれば、まま子たる身のおぬひがこの瀬に立ちて泣くは道理なり、もの言へば睨にらまれ、笑へば怒られ、氣を利かせれば小ざかしと云ひ、ひかえ目にあれば鈍な子と叱しかられる、二葉の新芽に雪霜のふりかかりて、これでも延びるかと思へるやうな仕方に、堪たへて真直ぐに延びたつ事人間わざには叶かなふまじ、泣いて泣いて泣き尽くして、訴へたいにも父の心は鉄かねのやうに冷えて、ぬる湯一杯たまはらん情もなきに、まして他人の誰たれにか慨かこつべき、月の十日に母ははさまが御おん墓はかまゐりを谷中やなかの寺に樂しみて、しきみ線香それぞれの供へ物もまだ終らぬに、母さま母さま私を引取つて下されと石塔に抱いだきつきて遠慮なき熱涙、苔こけのしたにて聞かば石もゆるぐべし、井戸がはに手を掛けて水をのぞ

きし事三四度に及びしが、つくづく思へば無情つれなしとても父様は
まこと真実のなるに、我れはかなく成りて宜からぬ名を人の耳に伝へれ
 ば、残れる耻はぢは誰たが上ならず、勿もつたい躰なき身の覚悟と心うちの中に詫
びごと言して、どうしても死なれぬ世に生なまなか中目を明きて過ぎんとすれ
 ば、人並のうい事つらい事、さりとはこの身に堪へがたし、一生
 五十年めくらに成りて終らば事なからんとそれよりは一筋に母様
 の御機嫌、父が氣に入るやう一切この身を無いものにして勤むれ
 ば家の内なみ風おこらずして、軒ばの松に鶴が来て巢をくひはせ
 ぬか、これを世間の目に何と見るらん、母御は世辞上手にて人を
 外らさぬ甘うまさあれば、身を無いものにして闇やみをたどる娘よりも、
 一枚あがりて、評判わるからぬやら。

お縫^{ぬい}とてもまだ年わかなる身の桂次が親切はうれしからぬに非^{あら}ず、親にすら捨てられたらんやうな我が如^{ごと}きものを、心にかけて可愛^{かわい}がりて下さるは辱^{かたじ}けなき事と思へども、桂次が思ひやりに比べては遥^{はる}かに落つきて冷やかなる物なり、おぬひさむ我れがいよいよ帰国したと成つたならば、あなたは何と思ふて下さろう、朝夕の手がはぶけて、厄介が減つて、楽になつたとお喜びなさろうか、それとも折ふしはあの話し好きの饒^{おしやべり}舌のさわがしい人が居なくなつたで、少しは淋しい位に思ひ出して下さろうか、まあ何と思ふてお出^{いで}なさるとこんな事を問ひかけるに、仰^{おつ}しやるまでもなく、どんなに家^{うちじう}中が淋しく成りましたよう、東京^{ここ}にお出あそばしてさへ、一ト月も下宿に出て入らつしやる頃は日曜が待どほ

で、朝の戸を明けるとやがて御足おとが聞えはせぬかと存じます
 る物を、お国へお帰りになつては容易に御出京もあそばすまじけ
 れば、又どれほどの御別れに成りまするやら、それでも鉄道が通
 ふやうに成りましたら度々御出あそばして下さりませうか、そう
 ならば嬉しけれどと言ふ、我れとても行きたくてゆく故郷ふるさとでな
 ければ、此処ここに居られる物なら帰るではなく、出て来られる都合
 ならば又今までのやうにお世話に成りに来まする、成るべくはち
 よつとたち歸りに直ぐも出京したきものと軽くいへば、それでも
 あなたは一家の御主人さまに成りて采配さいはいをおとりなさらずは叶
 ふまじ、今までのやうなお樂の御身分ではいらつしやらぬ筈はずと押
 へられて、されば誠に大難に逢あひたる身と思しめせ。
おぼ

我が養家は大藤村の中萩原なかはぎはらとて、見わたす限りは天目山てんもくざん、
 大菩薩峠だいぼさつたうげの山々峰々垣かきをつくりて、西南にそびゆる白妙しろたへの
 富士の嶺ねは、をしみて面かげを示めさねども、冬の雪おろしは遠
 慮なく身をきる寒さ、魚うをといひては甲府まで五里の道を取りにや
 りて、やうやうまぐろの刺身が口に入る位い、あなたは御存じなけれど
 お親父とつさんに聞て見給みたまへ、それは随分不便利にて不潔にて、東京
 より歸りたる夏分などは我まんのなりがたき事もあり、そんな処
 に我れは括くくられて、面白くもない仕事に追はれて、逢ひたい人に
 は逢はれず、見たい土地はふみ難く、兀々こつこつとして月日を送らね
 ばならぬかと思おもひに、氣のふさぐも道理とせめては貴嬢あなたでもあはれ
 んでくれ給へ、可愛さうなものでは無きかと言ふに、あなたはさ

う仰しやれど母などはお浦山^{うらやま}しき御身分と申てをりまする。

何がこんな身分うら山しい事か、ここで我れが幸福^{しやわせ}といふを

考へれば、帰国するに先だちてお作^{さく}が頓死^{とんし}するといふ様なことに

ならば、一人娘のことゆゑ父親^{てておや}おどろいて暫時^{しばし}は家督^{ざた}沙汰やめ

になるべく、然るうちに少々なりともやかましき財産などの有れ

ば、みすみす他人なる我れに引わたす事をしくも成るべく、又は

縁者の中なる欲^{うち}ばりども唯^{ただ}にはあらで運動することたしかなり、

その暁に何かいささか仕損なゐでもこしらゆれば我れは首尾よく

離縁になりて、一本立の野中の杉ともならば、それよりは我が自

由にてその時に幸福^{しやわせ}といふ詞^{ことば}を与へ給へと笑ふに、おぬひ惘^{あき}れ

て貴君^{あなた}はその様の事正気で仰しやりますか、平常^{つね}はやさしい方と

存じましたに、お作様に頓死しろとは蔭^{かげ}ながらの嘘^{うそ}にしるあんまりでござります、お可愛想なことをと少し涙ぐんでお作をかばふに、それは貴嬢^{あなた}が当人を見ぬゆゑ可愛想とも思ふか知らねど、お作よりは我れの方を憐^{あは}れんでくれて宜^いい筈、目に見えぬ縄につながれて引かれてゆくやうな我れをば、あなたは真の処何とも思ふてくれねば、勝手にしろといふ風で我れの事としては少しも察してくれる様子が見えぬ、今も今居なくなつたら淋しかろうとお言ひなされたはほんの口先の世辞で、あんな者は早く出てゆけと箒^{はうき}に塩花が落ちならんも知らず、いい気になつて御邪魔になつて、長居をして御世話さまに成つたは、申訳がありません、いやで成らぬ田舎へは帰らねばならず、情^{なさけ}のあらうと思ふ貴嬢がそのやうに

見すてて下されば、いよいよ世の中は面白くないの頂上、勝手にやつて見ませうと態わざとすねて、むつと顔がほをして見せるに、野沢さんは本当にどうか遊あそばしていらつしやる、何がお氣に障りましたのとお縫はうつくしい眉に皺しわを寄せて心の解げしかねる軀ていに、それは勿論もちろん正氣の人の目からは氣ちがひと見える筈、自分ながら少し狂つていると思ふ位なれど、氣ちがひだとして種なしに間違ふ物でもなく、いろいろの事が畳まつて頭脳あたまの中がもつれてしまふから起る事、我れは氣違ひか熱病か知らねども正氣のあなたなどが到底てもおもひも寄らぬ事を考へて、人しれず泣きつ笑ひつ、何処やらの人が子供の時うつした写真だといふあどけないのを貰もらつて、それを明けくれに出して見て、面と向つては言はれぬ事を並べて見

たり、机の引出しへ叮嚀ていねいにしまつて見たり、うわ言をいつたり
 夢を見たり、こんな事で一生を送れば人は定めし大白痴おほだわけと思ふ
 なるべく、そのやうな馬鹿になつてまで思ふ心が通じず、なき縁
 ならば切せめては優しい詞でもかけて、成仏するやうにしてくれた
 ら宜ささうの事を、しらぬ顔をして情ない事を言つて、お出いでがな
 くば淋しかろう位のお言葉は酷ひどいではなきか、正氣のあなたは何
 と思ふか知らぬが、狂氣きちがひの身にして見ると随分氣づよいものと
 恨まれる、女といふものはもう少しやさしくても好い筈ではない
 かと立てつづけの一ト息に、おぬひは返事もしかねて、私わたしは何
 と申てよいやら、不器用なればお返事のしやうも分らず、唯々こ
 ころばそく成りますとて身をちぢめて引退ひきしりぞくに、桂次拍子ぬ

けのしていよいよ頭の重たくなりぬ。

上杉の隣家^{となり}は何宗かの御梵刹^{おんてら}さまにて寺内^{じない}広々と桃桜いろいろ
植^{うゑ}わたしたれば、此方^{こなた}の二階より見おろすに雲は棚曳^{たなび}く天上界に
似て、腰ごろもの観音さま濡^ぬれ仏にておはします御肩^{おん}のあたり膝^{ひざ}
のあたり、はらはらと花散りこぼれて前に供^{しきみ}へし密の枝につもれ
るもをかしく、下ゆく子守りが鉢巻^うの上へ、しばしやどかせ春の
ゆく衛^ゑと舞ひくるもみゆ、かすむ夕べの朧^{おぼろづき}月^{おととし}よに人顔ほのぼ
のと暗く成りて、風少しそふ寺内の花をば去歳^{こぞ}も一昨年^{おとし}もそのま
への年も、桂次此処^{おほかた}に大方は宿を定めて、ぶらぶらあるきに立
ならしたる処なれば、今歳この度とりわけて珍らしきさまにもあ
らぬを、今こん春はとても立かへり蹈^{ふむ}べき地にあらずと思ふに、

ここの濡れ仏さまにも中々の名残をしまれて、夕げ終りての宵^{よひよ}
 々^ひ家を出て^{いで}は御寺参り殊勝に、観音さまには合掌を申て、我が
 恋人のゆく末を守りたまへと、お志しのほどこいつまでも消えねば
 宜^よいが。

下

我れのみ一人のぼせて耳鳴りやすべき桂次が熱ははげしけれど
 も、おぬひと言ふもの木にて作られたるやうの人なれば、まづは
 上杉の家にやかましき沙汰^{さた}もおこらず、大藤村にお作が夢ものど
 かなるべし、四月の十五日帰国に極^きまりて土産物など折柄日清^{にっしん}

の戦争画、大勝利の袋もの、ぱちん羽織の紐ひも、白粉をしろいかんざし桜さ
くらか香の油、縁類広ければとりどりに香水、石鹼しやぽんの気取りたるも
 買ふめり、おぬひは桂次が未来の妻にと贈りものの中へ薄藤色の
 襦じゆばん袷あじの襟に白ぬきの牡丹花ぼたんくわの形かたあるをやりけるに、これを眺
 めし時の桂次が顔、氣の毒らしかりしと後あとにて下女の竹が申き。

桂次がもとへ送りこしたる写真はあれども、秘しがくしに取納
 めて人には見せぬか、それとも人しらぬ火鉢の灰になり終りしか、
 桂次ならぬもの知るによしなけれど、さる頃はがきにて処用と申
 こしたる文面は男の通りにて名書きも六蔵の分なりしかど、手跡
 大分あがりて見よげに成りしと父親の自まんより、娘に書かせた
 る事論なしとここの内儀が人の悪き目にて睨にらみぬ、手跡によりて

人の顔つきを思ひやるは、名を聞いて人の善惡を判断するやうな
 もの、当代の能書に業なりひら平さまならぬもおはしますぞかし、され
 ども心用ひ一つにて悪筆なりとも見よげのしたため方はあるべき
 と、達者めかして筋もなき走り書きに人よみがたき文字ならば詮せん
 なし、お作の手はいかなりしか知らねど、此処の内儀が目の前に
 うかびたる形は、横巾ひろく長たけつまりし顔に、目鼻だちはまづく
 もあるまじけれど、うすくして首筋くつきりとせず、胴よりは
 足の長い女とおぼゆると言ふ、すて筆ながく引いて見ともなかり
 しか可笑をかし、桂次は東京に見てさへ醜わるい方では無いに、大藤村
 の光ひかる君帰郷といふ事にならば、機場はたばの女が白粉のぬりかた思は
 れると此処にての取沙汰、容貌きりようのわるい妻を持つぐらゐ我慢も

なる筈、水呑みの小作が子として一足飛のお大尽なればと、やがては実家をさへ洗はれて、人の口さがなし伯父伯母一つになつて嘲るやうな口調を、桂次が耳に入らぬこそよけれ、一人気の毒と思ふはお縫なり。

荷物は通運便にて先へたたせたれば残るは身一つに軽々しき桂次、今日も明日もと友達のもとを馳せめぐりて何やらん用事はあるものなり、僅かなる人目の暇を求めてお縫が袂をひかえ、我れは君に厭はれて別るるなれども夢いささか恨む事をばなすまじ、君はおのづから君の本地ありてその島田をば丸曲にゆひかへる折のきたるべく、うつくしき乳房を可愛き人に含まする時もあるべし、我れは唯だ君の身の幸福なれかし、すこやかなれかしと

祈りてこの長き世をば尽さんには随分とも親孝行にてあられよ、
母御前の意地ははごぜわるに逆らふやうの事は君として無きに相違なければ
どもこれ第一に心がけ給へ、言ふことは多し、思ふことは多し、
我れは世を終るまで君のもとへ文の便りをたたざるべければ、君
よりも十通に一度の返事を与へ給へ、睡ねぶりがたき秋の夜は胸いだに抱
いてまぼろしの面影をも見んと、このやうの数々を並らべて男な
きに涙のこぼれるに、ふり仰向あほのいてはんけちに顔を拭ぬぐふさま、心
よわけなれど誰たれもこんな物なるべし、今から帰るといふ故郷ふるさと
の事養家のこと、我身の事お作の事みなから忘れて世はお縫ひと
りのやうに思はるるも闇なり、この時こんな場合にはかなき女心
の引入られて、一生消えぬかなしき影を胸にきざむ人もあり、岩

木のやうなるお縫なれば何と思ひしかは知らねども、涙ほろほろこぼれて一ト言もなし。

春の夜の夢のうき橋、と絶えする横ぐもの空に東京を思ひ立ちて、道よりもあれば新しんじゆく宿までは腕車くるまがよしといふ、八王子までは汽車の中、をりればやがて馬車にゆられて、小こほとけ仏の峠もほどなく越ゆれば、上野原うへのぼら、つる川、野田尻のだじり、犬目いぬめ、鳥沢とりざわも過ぐれば猿はし近くにその夜は宿るべし、巴峽はきようのさけびは聞えぬまでも、笛吹川ふえふきがはの響きに夢むすび憂うく、これにも腸はらわたはたたるベき声あり、勝沼よりの端書一度とどきて四日目にぞ七里ななさとの消印ある封状二つ、一つはお縫へ向けてこれは長かりし、桂次はかくて大藤村の人に成りぬ。

世にたのまれぬを男心といふ、それよ秋の空の夕日にはかに搔か
 きくもりて、傘なき野道に横しぶきの難義さ、出あひし物はみな
 その様に申せどもこれみな時のはづみぞかし、波こえよとて末の
 松山ちぎれるもなく、男傾をとかげいせい城せいならぬ身の空涙こぼして何に成
 るべきや、昨日あはれと見しは昨日のあはれ、今日の我が身なに為
 す業しげければ、忘るるとなしに忘れて一生は夢の如し、露の世
 といへばほろりとせしもの、はかないの上なしなり、思へば男は
 結いひなづけ髪けの妻ある身、いやとても応かなとても浮世の義理をおもひ断
 つほどのことこの人この身にして叶めをとふべしや、事なく高砂をうた
 ひ納むれば、即すなはち新らしき一对の夫婦出来あがりて、やがては父
 とも言はるべき身なり、諸縁これより引かれて断ちがたき絆ほどし次第

にふゆれば、一人一箇の野沢桂次ならず、運よくば万の身代十萬
 に延して山梨県の多額納税と銘うたんも斗りがたけれど、契りし
 ことば みなと 詞はあとの湊に残して、舟は流れに随がひ人は世に引かれて、遠
 ざかりゆく事千里、二千里、一万里、此処三十里の隔てなれども
 心かよはずは八重がすみ外山の峰をかくすに似たり、花ちりて青
 葉の頃までにお縫が手もとに文三通、こと細か成けるよし、五月
 雨軒ばに晴れまなく人恋しき折ふし、彼方よりも数々思ひ出の詞
 うれしく見つる、それも過ぎては月に一二度の便り、はじめは三
 四度も有りけるを後には一度の月あるを恨みしが、秋蚕のはきた
 てとかいへるに懸りしより、二月に一度、三月に一度、今の間に
 半年目、一年目、年始の状と暑中見舞の交際になりて、文言言

うるさしとならば端書はがきにても事は足るべし、あはれ可笑をかしと軒ば
の桜くる年も笑ふて、隣の寺の観音様御手おんてを膝に柔和の御相これ
も笑めるが如くごと、若いさかりの熱ほといふ物にあはれみ給へば、此
処なる冷やかのお縫ととも笑くぼを頬ほにうかべて世に立つ事はならぬ
か、相かはらず父様ととさまの御機嫌、母の氣をはかりて、我身をない
物にして上杉家の安穩をはかりぬれど、ほころびが切れてはむづ
かし。

青空文庫情報

底本：「にいりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社

1949（昭和24）年6月30日発行

2003（平成15）年1月10日116刷改版

2008（平成20）年6月10日128刷

初出：「太陽」

1895（明治28）年5月号

※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本に
そって修正し、組み入れました。

「ゆく雲」（入力：青空文庫、校正：米田進、小林繁雄）

※送りがな、振りがな、漢字の使い方の不統一は、底本通りです。

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：酔いどれ狸

校正：岡村和彦

2014年10月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ゆく雲

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>